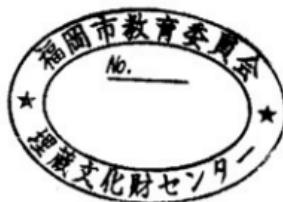


野 多 目 A

—野多目A遺跡群第3次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第263集



1991

福岡市教育委員会

野 多 目 A

—野多目A遺跡群第3次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第263集



1991

福岡市教育委員会

遺跡調査番号	8956	遺跡略号	NMA3
調査地地番	南区野多目1丁目	分布地図番号	三宅39
開発面積	11,000m ²	調査対象面積	1,700m ²
調査期間	1989年11月17日～12月18日		

序

野多目A遺跡は、福岡市の南部に位置し、これまでの2度の調査で、縄文時代の遺物包含層、弥生時代前期の水田跡、中世の集落跡が検出されている遺跡です。しかし、このあたりを含む福岡市南区の一帯は、市街地南郊の住宅地として、宅地化が進んできた地域であり、農地や山林のほとんどは、姿を消しつつあります。平成元年、野多目A遺跡の東に隣接して大規模なマンションの開発計画が持ち上がり、福岡市教育委員会では、急速、発掘調査を実施いたしました。本書は、この野多目A遺跡第3次調査の成果を報告するものです。

本調査では、那珂川の氾濫による流路、中世の集落跡、道路状造構などが調査されました。

本書が市民の皆様の文化財に対する理解を深めていく上で広く活用されると共に、学術研究の分野でも貢献できれば幸いです。

発掘調査から資料整理までの費用負担・便宜にご協力をいただいた、ダイア建設株式会社を始めとする多くの方々のご協力に対し、心から謝意を表すものです。

平成3年1月10日

福岡市教育委員会

教育長 井口 雄哉

例　　言

1. 本書は、マンション建設に先立ち、福岡市教育委員会が発掘調査を実施した、福岡市南区野多目1丁目地内に関する発掘調査報告書である。
2. 本書の編集・執筆は、大庭康時が行なった。
3. 本書に使用した遺構実測図、遺物実測図および製図は、大庭が作成した。なお、これらの実測図中で用いられている方位は、磁北である。
4. 本書に使用した遺構写真は、大庭が撮影した。
5. 遺物の整理には、生垣綾子・保利みや子・古谷宏子・村田喜代美があたった。
6. 本調査に関するすべての記録類・出土遺物は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵管理される予定である。

本文目次

第一章 はじめに.....	1
1. 発掘調査にいたるまで.....	1
2. 発掘調査の組織と構成.....	1
3. 遺跡の立地と歴史的環境.....	2
第二章 発掘調査の記録.....	4
1. 発掘調査の概要と経過.....	4
2. 遺構.....	6
(1) I 区の遺構	6
道路状遺構.....	6
1号掘立柱建物址.....	6
2号掘立柱建物址.....	6
3号掘立柱建物址.....	6
4号掘立柱建物址.....	6
5号掘立柱建物址.....	9
(2) II 区の遺構	13
3. 遺物.....	13
(1)縄文時代の遺物.....	13
(2)古墳時代の遺物.....	13
(3)歴史時代の遺物.....	13
第三章 まとめ.....	16
(1)I 区について.....	16
(2)II 区について.....	16

第一章 はじめに

1. 発掘調査にいたるまで

1988年7月11日、ダイア建設株式会社より、福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課に対して、福岡市南区野多目1丁目地内における埋蔵文化財事前調査願が提出された。同地は、1983年度に住宅・都市整備公団から委託を受けて発掘調査が行われた地点に隣接しており、また、福岡市教育委員会が周知している、野多目A遺跡群と三宅B遺跡群とのちょうど中間に位置していた。そこで、福岡市教育委員会では、同年8月10・11・24・25日わたって、試掘調査を実施した。その結果、11,000m²をこえる申請地の大部分は旧河川の河道にはいるため遺構は存在しなかつたが、申請地の西端部において台地部分が検出され、遺構の存在が確認された。これを受けて、埋蔵文化財課はダイア建設株式会社と協議を行ない、1989年、建物建設予定部分にかかる約1,700m²について発掘調査を行なうこととし、受託契約を結んだ。

発掘調査は、1989年11月8日より、1.5ヶ月の調査期間を予定して開始された。

2. 発掘調査の組織と構成

調査委託 ダイア建設株式会社

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 佐藤善郎（前任）

調査統括 埋蔵文化財課課長 柳田純孝

埋蔵文化財第2係長 柳沢一男

調査庶務 埋蔵文化財第1係 松延好文

調査担当 埋蔵文化財第2係 大庭康時

調査作業 馬瀬直子 江越初代 大城松徳 大庭智子 篠塚ヒロ子 澄川アキヨ

関加代子 関義種 曽根崎昭子 大長正弘 境君子 藤野信子

徳永静雄 松井一美 森山恭助 森山タツエ 濱地フサエ 柳瀬伸

山口美枝子 山崎光一 村崎祐子 権藤利雄 富田輝子

その他、発掘調査に関する種々の条件整備、調査中の便宜については、ダイア建設株式会社、東海興業株式会社の御協力をいただいた。

3. 遺跡の立地と歴史的環境

野多目A遺跡群は、福岡平野の西部を北流する、那珂川左岸の中位段丘上に位置している。この段丘と那珂川との間は、約400mほど離れており、この部分には那珂川によって形成された沖積地が、那珂川に沿ってのびている。この沖積面と、段丘上との比高差は、約1.5mをはかるが、段丘上は開田により大きく削平されている。

野多目A遺跡群の周辺では、すでに、野多目前田遺跡（野多目A遺跡群第1次調査）、野多目遺跡（野多目A遺跡群第2次調査）、野多目古屋敷遺跡、野多目括渡遺跡第1～3次調査などが行なわれている。さらに目を広げれば、老司古墳（前方後円墳、初期横穴式石室）、三宅廃寺、日佐遺跡などに代表される諸遺跡が、近辺に分布している。しかし、一部を除けば、調査例は少なく、いまだ実態は明らかではない。

旧石器時代の遺跡については、野多目前田遺跡で三稜尖頭器、ナイフ形石器各1点、野多目括渡遺跡第1次調査で、尖頭器・台形石器が発見されていることとなる。那珂川右岸の日佐遺跡においても、ナイフ形石器が出土している。

縄文時代では、柏原遺跡で早期・晚期の集落址が調査されている。野多目括渡遺跡では、後期前半の貯蔵穴、溝状遺構が調査されている。また、野多目A遺跡群第2次調査では、北久根山式・三万田式等の土器片が出土しており、周辺に後期後半から晩期前半にかけての遺構が存在する可能性がある。

縄文時代終末期では、野多目A遺跡第2次調査において、水田遺構が検出された。

弥生時代では、那珂川東岸に、比恵遺跡・那珂遺跡・板付遺跡・須恵遺跡・日佐遺跡などの大規模な遺跡がひしめきあっている。これに対し、那珂川西岸では、やや散漫といえる。南大橋遺跡は、中期の斎棺墓地である。和田遺跡も斎棺墓地とされるが、すでに消滅している。

古墳時代になると、福岡平野における有力な地域のひとつとなったようである。老司古墳は、全長約90mの前方後円墳である。これは、福岡平野では最大規模の古墳で、後円部に3基、前方部に1基の初期横穴式石室が築かれている。卯内尺古墳は、削られて墳形は不明だが、三角縞神獣鏡・銅鏡が出土している。

古代では、三宅廃寺・三宅瓦窯址・老司瓦窯址などがある。南区三宅は、從来那ノ津官家の所在地に比定されていたが、1984年博多区所在の比恵遺跡群で、6世紀後半に営まれた倉庫群が検出されるに及び、それを以て那ノ津官家にあてる説が浮上してきた。

中世以降については、本遺跡の近辺では必ずしも成果をあげるに至っていない。野多目A遺跡第2次調査では、柱穴が多数検出されており、掘立柱建物1棟以上が推定されている。おそらく、中位段丘上に集落が営まれ、沖積地を開田していたのであろう。



Fig. 1 周辺遺跡分布地図 (1/25,000)

1. 野多日 A 遺跡群第 1 次調査 (野多日前田)
2. 野多日 A 遺跡群第 2 次調査 (野多日)
3. 野多日 A 遺跡群第 3 次調査
4. 野多日古墳散在跡
5. 野多日古墳羣跡
6. 野多日古墳群
7. 野多日浦 / 池道跡
8. 和田 A 電線群
9. 三宅庵寺
10. 三宅瓦窯跡
11. 花畑 C 遺跡群
12. 老河古墳
13. 駒内尾古墳
14. 老河瓦窯跡
15. 老松神社古墳群
16. 日羽塚古墳
17. 日佐原遺跡

第二章 発掘調査の記録

1. 発掘調査の概要と経過

発掘調査は、1989年11月7日より同年12月18日まで実施された。この間の実働日数は、26日である。

発掘調査区は、試掘調査により中位段丘上とされた部分と、その東に接する微高地部分の2ヶ所にわかれた。調査にあたっては、前者をⅠ区、後者をⅡ区とし、まずⅡ区から調査を行なった。調査の経過は、次の通りである。

11月7日	調査開始
11月8日～14日	Ⅱ区表土剥ぎ
11月8日～22日	Ⅱ区調査
11月24日～12月5日	Ⅰ区表土剥ぎ
11月27日～12月15日	Ⅰ区調査
12月18日	調査終了

調査面積は、Ⅰ区が $1,081\text{m}^2$ 、Ⅱ区が 658m^2 で、合計 $1,739\text{m}^2$ である。

基本層序は、上から水田耕土、水田床土、地山粘土となり、第Ⅱ区では、地山が粘土ではなく、砂礫層となる。なお、調査着手時における土地の現況は水田（Ⅱ区）および、水田を埋め立てた宅地（Ⅰ区）であった。この水田を開田した段階で、旧地形を削って均しておらず、これによって遺構検出面にあたる地山面は、その表面を削られている。したがって、地山面上にみられる段差は、水田經營時における水田区画によって創出されたものであり、本来の地形を反映していない。また、このため遺構の上面も、削平を受けているものである。



Fig. 2 土層実測図 (1/40)



Fig. 3 調査地点周辺測量図 (1/1,000)

2. 遺構

(1) T区の遺構

T区は、中位段丘上にあたり、柱穴344基・土壙15基・溝7条が検出された。

柱穴は、ほとんどのものが柱痕跡をとどめていない。柱穴から出土した遺物は、ほとんどが縄文時代晩期の土器片であるが、一部の柱穴から白磁片、土鍋片等が出土している。また、柱穴の規模は、いずれも径20~30cm程度であり、これらの点からみて、柱穴はすべて中世のものと考えられる。

土壙は、大型、不整形のもので、廐棄壙であろう。出土遺物は、柱穴と同様に、縄文時代の土器片・黒曜石片がほとんどであるが、柱穴と同時期の土壙と考えるのが妥当と思われる。

溝は、調査区を横断するものと、部分的にのびるものがある。後者には、肥前系染付片を出土したものがあり、近世以後の開田、水田経営にともなう溝状遺構・区画であろう。前者には、溝1・溝5・溝6がある。溝1は、ゆるく弧を描いてのびるが調査区南辺近くでと切れる。ここから、40cm程度をあけて溝4が始まっており、また両溝は埋土も共通する点から、一連のものと考えられる。溝1は、柱穴を切っており、中世以降のものである。溝5と溝6は調査区を横断して平行しており、道路側溝と考えることができよう。

道路状遺構

溝5と溝6にはさまれた部分を、道路としてとらえたい。幅は、溝の心々間距離で1.8m~2.6mをはかる。方位は、N-11°40' - E（磁北）をとり、ほぼ南北方向といえる。この方位は、推定されている条里地割の方向（N-37° - W）とは一致しない。調査区南壁、北壁の土壙観察によれば、路面は削平され、全く残っていない。

1号掘立柱建物址

桁行3間×梁間2間の側柱建物である。柱筋には、ややばらつきがみられる。

2号掘立柱建物址

桁行3間×梁間2間の側柱建物である。北西隅の柱は、土壙15に切られ、残っていない。北側の梁筋には、中間の柱がみられない。北妻の正面には、0.7m程の間隔をあけて、柱間1.8mで2本の柱が立てられている。ここに庇がかけられたものとすれば、入口はこの部分にあてられる。

3号掘立柱建物址

桁行3間×梁間2間の側柱建物である。

4号掘立柱建物址

桁行2間×梁間1間の建物である。南側妻の正面に、0.7~0.85mの間をおいて、柱間1.0m

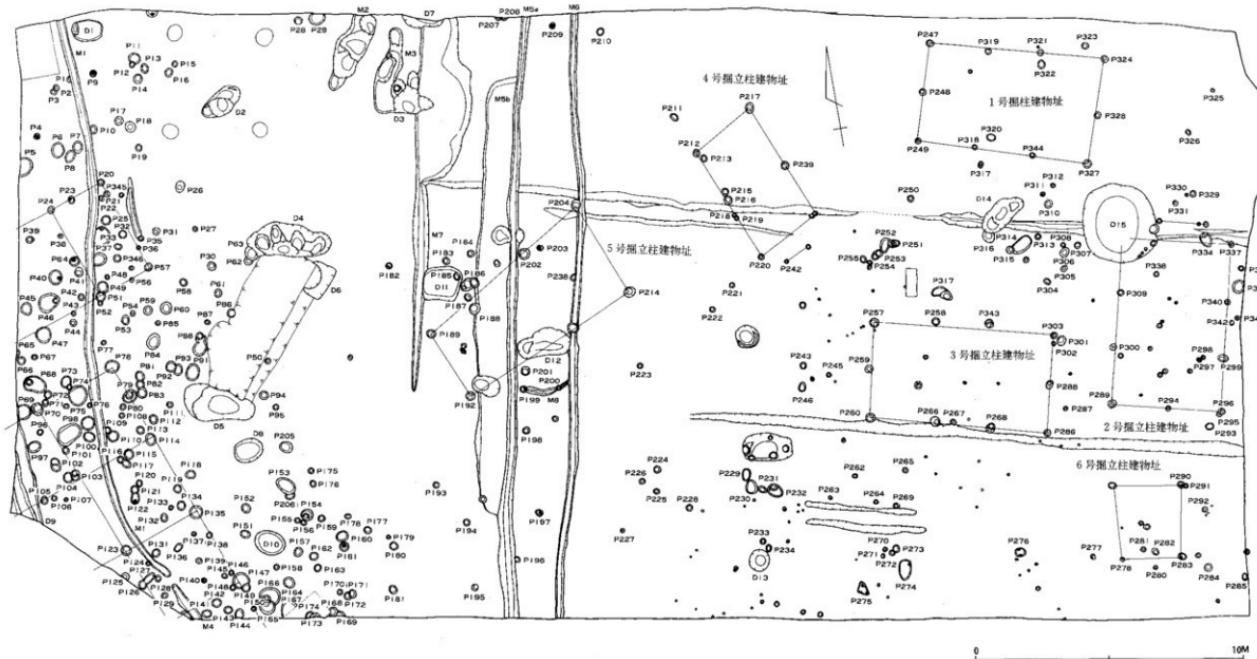


Fig. 4 I区遺構全図 (1/150)

で2本の柱が立てられており、2号掘立柱建物と同様に入口がつくものと思われる。

5号掘立柱建物址

桁行3間×梁間1間の建物である。桁行の柱筋には、かなりばらつきがあり、復原に無理があるかもしれない。溝5、溝6に切られており、道路状遺構に先行する建物址である。

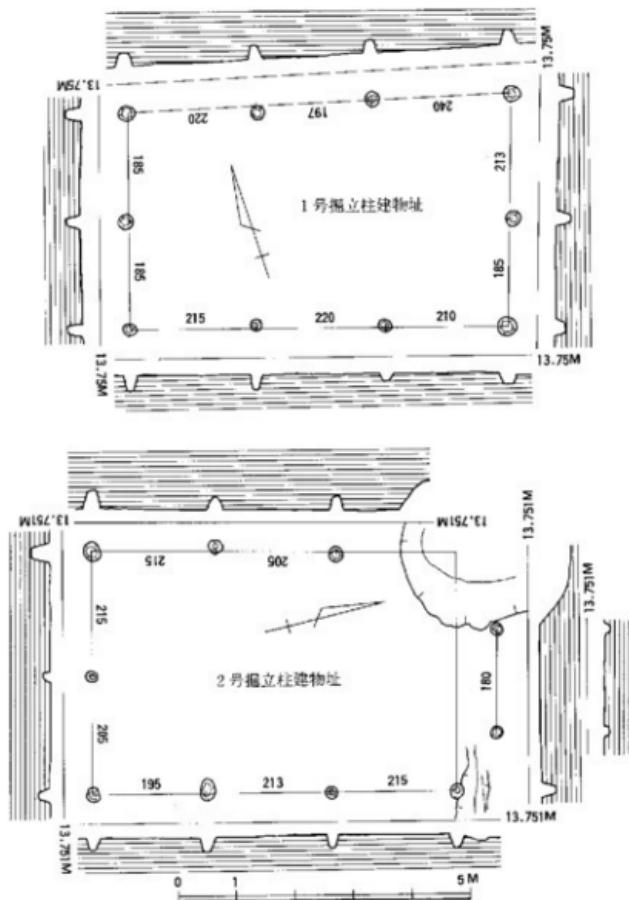


Fig. 5 掘立柱建物址実測図 1 (1/100)

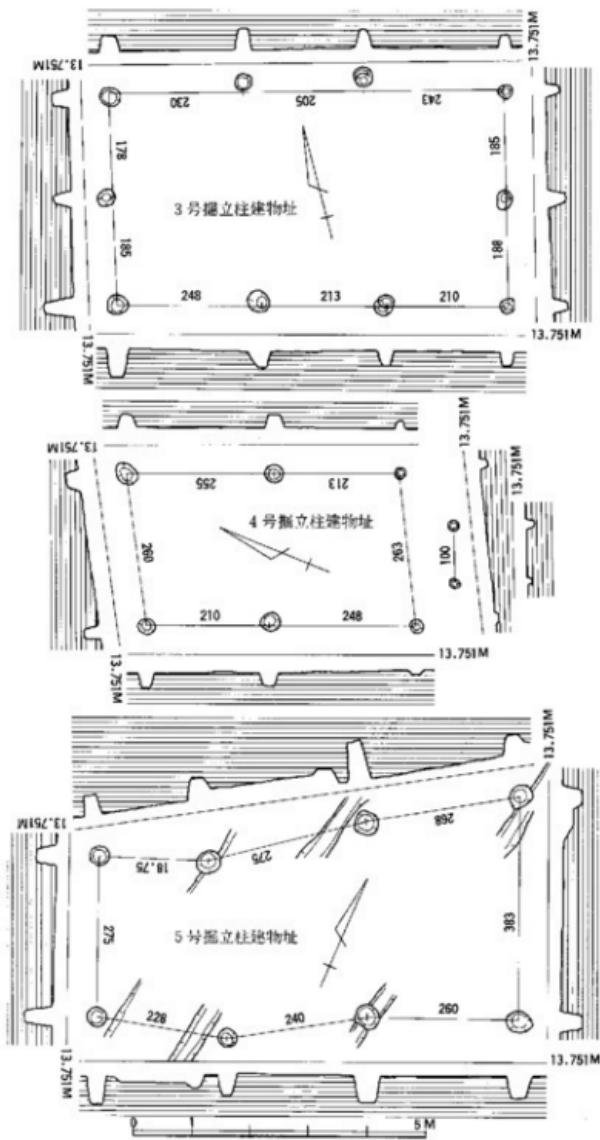


Fig. 6 掘立柱建物址尖測圖 2 (1/100)

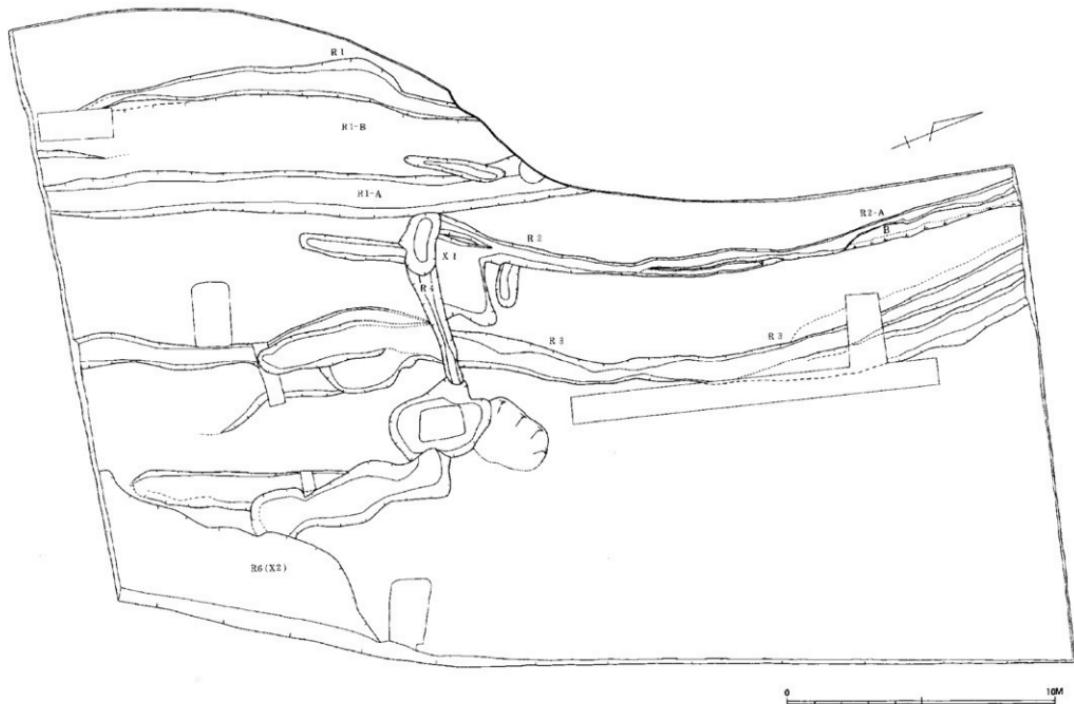


Fig. 7 II区透構全体図 (1/150)

(2) II区の遺構

II区では、旧河道と考えられる落ちこみ、小流路などが検出された。明らかに人為的とみられる溝、水路は、確認できなかった。また、II区の基盤となっているのは砂疊層であり、粘土層は、I区に接するII区西端で一部みられたのみである。したがって、中位段丘は、I区からII区に移る部分で落ち込むものと思われる。

R1～R5は、浅い皿状の断面を呈するもので、小流路と考えられる。あるいは、氾濫などの際に、一時に水が走った痕かもしれない。R1は、14世紀前半、R2は、12世紀後半頃の遺物を出土している。

R6は、旧河道の西岸の一部であろう。丁度蛇行した部分で、急傾斜で深く落ちこんでいる。調査区の縁辺にかかっているため、底面まで掘り下げるることはできなかった。12世紀後半頃までの遺物が、出土している。

3. 遺物

I区、II区をあわせて、最も多く出土したのは、縄文時代晩期の土器片である。今回の調査では、縄文時代の遺構は全く検出されていない、周辺から流れ込んだものであろう。その他に、古式土師器片、土師器皿・壺、土鍋、土師器羽釜、須恵器、瓦器塊、東幡系須恵器鉢、備前焼すり鉢、白磁碗・皿、青磁碗・皿、陶器片、铁刀子・火打ち鎌などが出土している。

(1)縄文時代の遺物

1は、II区の表土剥ぎの際に出土した阿高式土器片である。中期に通る遺物は、この1点のみである。4・5・6・7・8は、精製の浅鉢型土器である。器壁は、丁寧に研磨されている。2・9・12は、粗製の深鉢型土器である。10は、外面に横位の板ケズリ、内面は横方向に平滑なナデを施している。

13は、黒曜石製の石鏃である。14～24は、黒曜石の剝片である。14には、一辺に押圧剥離による刃潰しが施されている。25は、黒曜石の石核である。26・27は、安山岩で、26は剝片、27は石核であろう。

(2)古墳時代の遺物

28・29は、須恵器の壺蓋である。29には、ヘラ記号がみられる。

(3)歴史時代の遺物

30～34は須恵器である。31は、高台部分が剥落している。

35・36は、土師器の皿である。底部は、回転糸切りする。37は、土師器の杯である。底部は回転糸切りで板状压痕がみられ、内底部には、ナデを施す。38は、土鍋である。口縁部の上面には、繩目がころがされている。

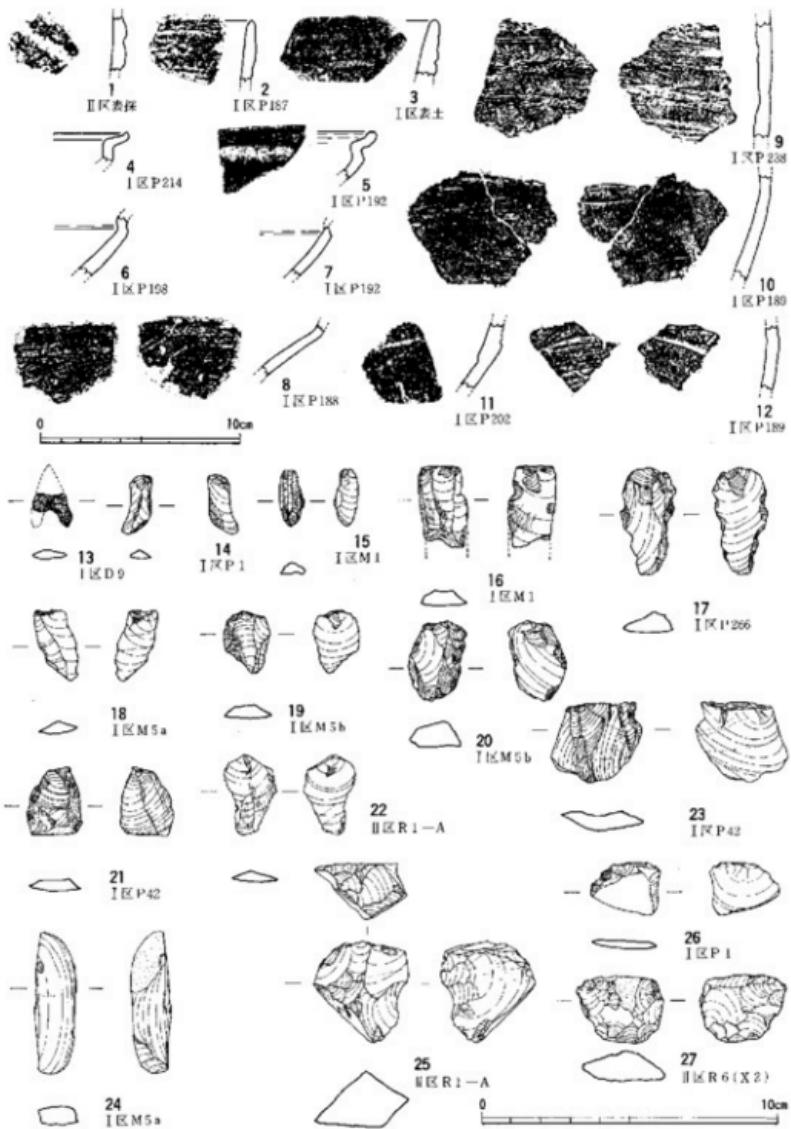


Fig. 8 出土遺物実測図 1 (1/3, 1/2)

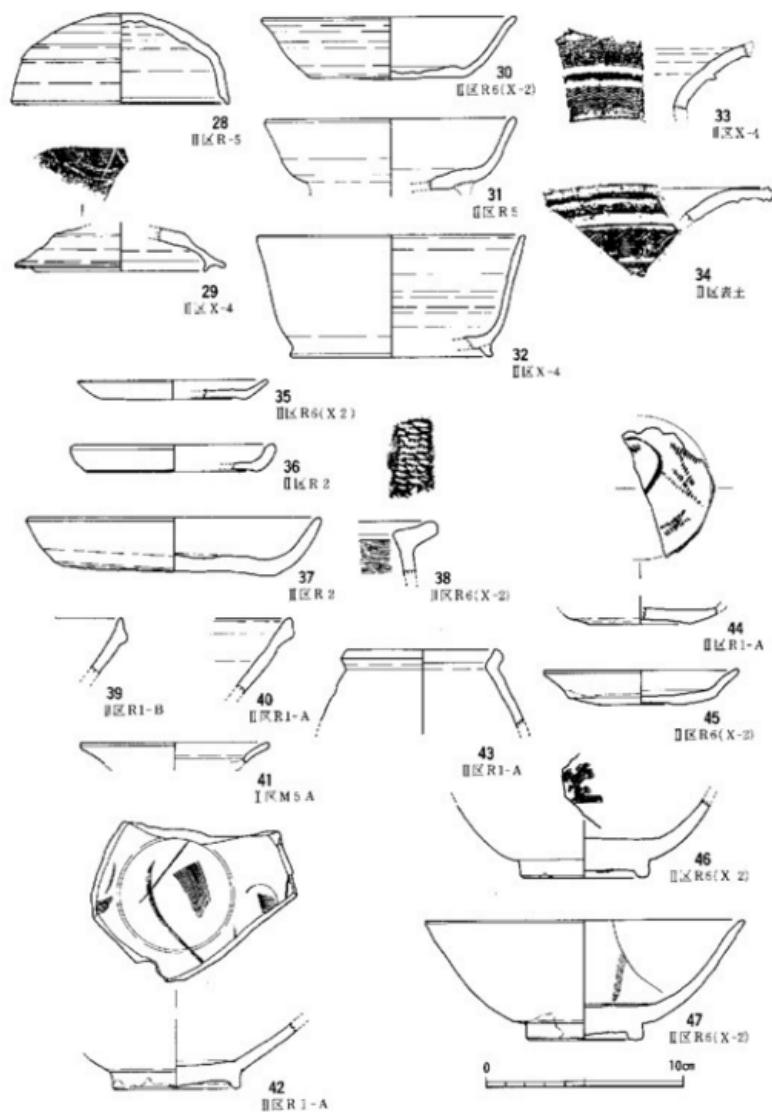


Fig. 9 出土遺物実測図 2 (1/3)

39・40は、東播系須恵器の鉢である。

41・42は白磁である。42の内面には、片切り彫りと櫛描き文が施されている。43は、青灰釉を施した陶器の短頸壺である。44～47は、青磁である。44は、同安窯系の皿で、見込みには片切り彫りと、櫛描きの雷光文が施されている。46・47は、龍泉窯系青磁の碗である。46の見込み中央には、意匠不明のスタンプ文がみられる。

第三章 まとめ

今回の発掘調査では、中世の集落部分にあたるⅠ区と、この集落に隣接した低地であるⅡ区を調査した。以下、調査区ごとに、若干のまとめを試みたい。

(1) Ⅰ区について

Ⅰ区では、柱穴・土壤・溝を調査した。これらの遺構を、その埋土から分類すると、A—黒色粘質土がつまつたもの、B—暗褐色粘質土のもの、C—灰色土のものに大別することができる。これに基いて、掘立柱建物址、溝をみると、Aには、4号・5号掘立柱建物址が、Bには、2号・6号掘立柱建物址、溝5・溝6が、Cには1号・3号掘立柱建物址、溝1・溝4があたる。さらに、切り合ひ関係から前後関係を求めるに、5号掘立柱建物址の柱穴が溝5・溝6に切られ、溝1が、Bを埋土とする柱穴を切る点から、A(第1期)→B(第2期)→C(第3期)の順が考えられる。

第1期は、4号・5号掘立柱建物址が営まれた段階である。この両者は、桁方向を直交させている。柱筋のばらつきの少ない4号掘立柱建物址で方位をとると、N-22°-Wをさす。

第2期になると、調査区をほぼ南北方向に突っ切って、道路が通される。この時期に属する2号・6号掘立柱建物址は、道路と主軸方向を一致させている。

第3期には、Ⅰ区東半部に、1号掘立柱建物址と3号掘立柱建物址がならんでいた。この2棟は、その梁方向を、第2期の道路状遺構にはほぼ一致させている。第3期までこの道路状遺構が残っていたかどうかは、明らかではない。しかし、Cの埋土を持つ柱穴・土壤が、道路状遺構の周りにみとめられない点を考えれば、溝5・溝6はすでに埋っていたとしても、道路もしくは、それに類するものが、この部分に存在した可能性は考えなくてはならない。

なお、柱穴の集中する部分は、Ⅰ区の西4分の1ほどの範囲におさまっている。

(2) Ⅱ区について

Ⅱ区では、人為的な遺構は、全くみとめられなかった。しかし、それはこの部分が放置されていたことを示すものではない。おそらくは、Ⅰ区の集落に付属するもの、すなわち耕地がひらかれていたものと思われる。発掘調査に際して、水田等の耕地の跡がみられなかつたのは、那珂川・老司川による氾濫によって、度々耕地が流されたことや、後世の開発によって、耕土部分まで擾乱されたことによるのであろう。

図 版
PLATES

P.L. I



(1) 調査区遠景（東より）



(2) II区土壠堆積状況（西より）



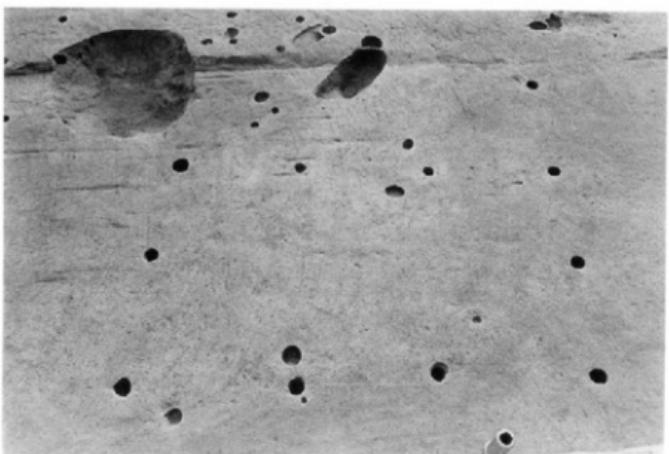
(1) I区全景 (南より)



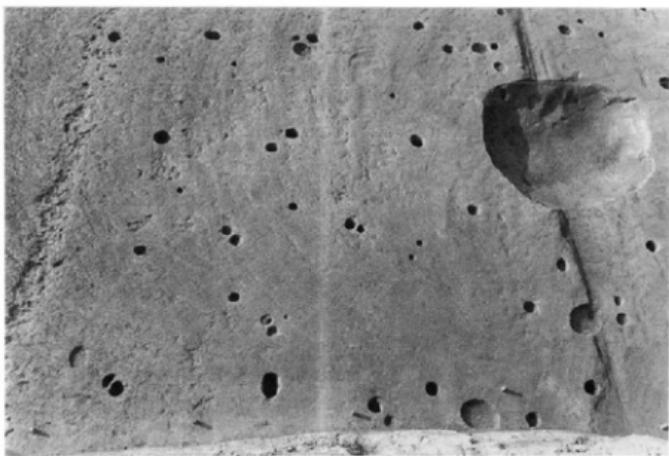
(2) I区全景 (西より)



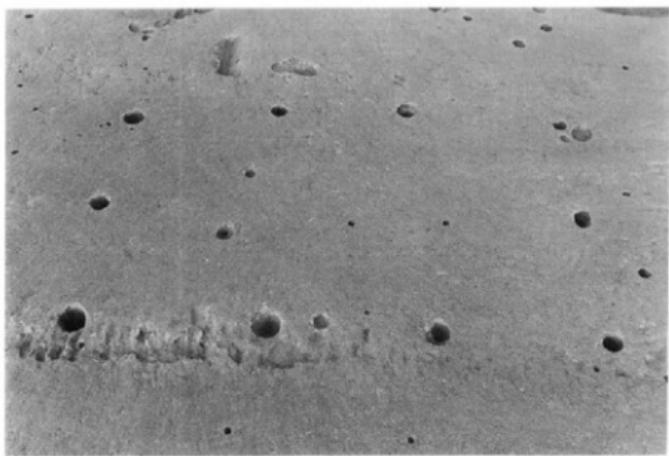
(1) 道路状遺構（北より）



(2) 1号掘立柱建物址（北より）



(1) 2号据立柱建物址 (東より)



(2) 3号据立柱建物址 (南より)



(1) Ⅱ区全景 (西より)



(2) Ⅱ区全景 (北より)



(1) Ⅱ区R 1 (南より)



(2) Ⅱ区R 5 (南より)

福岡市

野多目 A

福岡市埋蔵文化財報告書第263集

1991年3月15日発行

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 博巧印刷株式会社

福岡市南区那の川1丁目9の4